



テオドール・ヘルツル 1860-1904

3/6.88

28

叢書・ユニベルシタス 330

# ユダヤ人国家

ユダヤ人問題の現代的解決の試み

テオドール・ヘルツル

佐藤康彦 訳

横浜市立大学図書館

91 W 7 1901

受 入

法政大学出版局

DER

# JUDENSTAAT.

VERSUCH

EINER

MODERNEN LÖSUNG DER JUDENFRAGE

VON

THEODOR HERZL

DOCTOR DER RECHTE.



LEIPZIG und WIEN 1896.  
M. BREITENSTEIN'S VERLAGS-BUCHHANDLUNG  
WIEN, IX., WÄHRINGERSTRASSE 5.

「ユダヤ人国家」初版本の扉

目次

ユダヤ人国家 1

はしがき 1

I 序論 6

II 総論 21

ユダヤ人問題 21 従来の解決の試み 24 反ユダヤ主

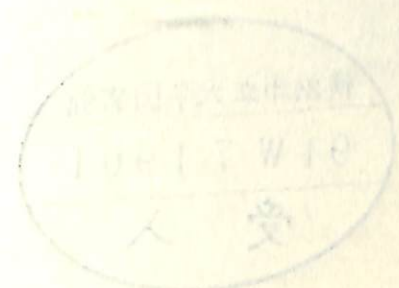
義の諸原因 26 反ユダヤ主義の効果 28 プラン 30

パレスチナかアルゼンチンか 33 欲求、組織、流通 34

III ユダヤ会社 37

主要な特徴 37 不動産業務 38 土地買収 39 建物

40 労働者住宅 41 「未熟練」労働者 42 一日七



時間労働制	43	労働扶助	46	市場交流	48	住居の
他のカテゴリー	49	清算のいくつかの形式	50	企業		
体の保証	53	ユダヤ会社のいくつかの活動	56	産業		
の活性化	57	専門労働者の入植	59	資金調達	59	
IV 地域グループ	64					
移植	64	グループ移住	66	我々の司牧者	67	地域
グループの総代	67	都市計画	69	中産階級の移動	70	
大量集団の現象	71	我らの人材	77	小さな習慣	78	
V ユダヤ人協会とユダヤ人国家	80					
国家業務の執行	80	ユダヤ人たちの執行者	84	土地		
獲得	86	憲法	88	言語	90	神権政治
軍隊	92	国旗	92	互恵条約と引渡し条約	93	ユダ
ヤ人移住の諸利益	95					
結語	98					

ボヘミアにおけるユダヤ人狩り 105

「消え去った」時 114

フランスの状況 121

ガリチアの劫火 128

法律の敵 136

ジャーナリストの学校 152

操縦可能な飛行船 165

訳注 177

訳者あとがき 186

テオドル・ヘルツルは、一八六〇年五月二日に、当時のオーストリア＝ハンガリー二重帝国の一方の首都ブダペストで、同化ユダヤ人の両親のあいだに生まれた。父親は運輸業で成功し、テオドルがユダヤ系の小学校に通うころには、ハンガリア銀行の重役も勤めていた。父親は息子をつれて週末にはユダヤ教会に通うユダヤ教徒であったが、現実の社会生活においては、当時この都会に住む多くのユダヤ人がそうであったように、オーストリア＝ドイツ文化を志向し、ハンガリー国民であることを自覚する同化ユダヤ人であった。テオドルは、神経過敏な感受性の強い性質を母方から受け継いだといわれるが、ドイツ的教養の持ち主であった母親の意志もあって、実業中学校からキリスト教系の文科高等中学に転じ、さらに一八七八年に「ドイツの著作家になるため、および法律を専攻するために」家族とともにウィーンへ移住する。その頃、父親の事業は傾き、ただ一人の妹はその直前に病気で亡くなっていた。

当時のウィーンは、大帝国の首都としてまさに世紀末文化の胎動期を迎えていた。同じユダヤ系の芸術家や思想家としては、マラー、シュニツラー、アルテンベルク、フロイト、クラウス、ホーフマンスタール、シェンベルクらが、その頃この都市でそれぞれの青少年時代を送っていた。ヘルツルは初志に従い、戯曲の習作に励みながらウィーン大学法科生として学び、六年後博士号を得て司法修習生となる。その間、加入していた学生団体『アルピア』が反ユダヤ的傾向を示したために、退会を申し出て逆に除名されるとい

う体験をなめるが、この事件と、さらに彼が法曹界で身を立てることを断念し、著作家の道に専心するようになる転身の背景には、何よりもまず一八八〇年代に入って急激に高まった中・東欧における反ユダヤ主義のうねりを認めることができよう。

ヨーロッパのキリスト教国家における他宗教に対する寛容は、近代に入ってスピノザやレッシンクラの大思想家によって準備され、社会的には啓蒙主義的絶対政治を推し進める君主たちによって実現した（たとえばオーストリアでは一七八二年にヨーゼフ二世によって発せられた「寛容令」）。しかし、近代的憲法によるユダヤ人の法的同権化はかなり遅れ、オーストリア＝ハンガリーにおいては一八六七年、ドイツにおいてはさらにその四年後を待たなければならなかった。そして、これに伴うユダヤ人との婚姻の自由と職業差別の撤廃、そして、ユダヤ人のゲットーからの外部進出と同化傾向に対して、既得の権利を守ろうとする非ユダヤ人の側からする激しい反発が、とくにドイツ・ナショナリズムの側から思想界や政治の世界に台頭するだけではなく、貧しく保守的な地方農村に古くから潜在していたユダヤ人排斥が大規模な迫害<sup>ペルセキュション</sup>となって頻発する。

知識階級の多くのユダヤ人たちが、政治・社会的な組織体制の内部に入るよりも、比較的独立した個人的な職業である中小企業家、著作家、ジャーナリスト、弁護士、医師といった職業を選ぶのは、このような背景のしからしめるところでもあるが、ヘルツルの転身もまた、後にクラウスやカフカがそうであったように、司法の世界から著作界へと通じていった。

ヘルツルはそれ以後十四年の短い生涯で十六篇の戯曲を書き、そのうち五篇は、彼自身の野心の目標であり、当時のドイツ語圏の演劇界でもっとも高い評価を得ていたウィーン・ブルク劇場で上演されたし、また

数篇はニューヨーク、ベルリン、プラハでも舞台上に取り上げられた。それらの多くは、内容的に当時のウィーンの観客層の嗜好に合った「ほろ苦いサロン風コメディ」だったにもかかわらず、いずれも観客は少なく演劇界の評価を得るには至らなかった。むしろ彼の名を高めたのは、一八八七年以後にウィーンの新聞に発表された紀行文を初めとする多くのフェイトン（新聞芸欄への寄稿文）であった。これを契機にして、ヘルツルはジャーナリズムの世界に自己実現を志すようになる。

十九世紀の最後の四半世紀は、産業の発達と技術の進歩（とくに製紙技術、印刷輪転機、運送車両等の発明と進歩）にともない、ジャーナリズムの隆盛と文化の大衆化が招来された時代である。とくに、多くの複雑な漢字の鑄造を必要としないアルファベット植字による印刷は、多数の新聞雑誌の発行を容易にし、新しい社会思想や近代的政治思想の興隆と相まってウィーン近代社会に多様な「世論」の形成を促すに至った。そしてこの世論のリーダーとなったのが、英国の『タイムズ』、フランスの『フィガロ』と並んでドイツ語圏の知識層に多く読まれていた『ノイエ・フライエ・プレッセ』（新自由新聞）である。当時の編集主幹モリッツ・ベネデクトはユダヤ系の同化主義者で、多民族の協和を志向する典型的なオーストリア人として、この国の公衆を自由な世論へと糾合し、アリア条項のないドイツ・オーストリア文化の王国を作ろうことを標榜していた。この点で、後にシオニズム運動の推進者となったヘルツルは、当然ベネデクトと対立をきたすことになるが、当初は、彼もまた他の多くの作家たちと同じようにこの新聞に文章が掲載されることを熱望し、それが実現されるとともに、優れたフランス語の能力を買われ、一八九一年三十歳のとき、同紙のパブリック通信員としてフランスに赴くこととなった。

普仏戦争に敗れて第三共和制議会政治のもとで揺れていた当時のフランスにおいて、ヘルツルがどんなに

真剣な社会的関心と優れた感受性によってフランスの現実を見つめたかは、この書に訳出した『ジャーナリストの学校』、『法律の敵』、『フランスの状況』などの優れたルポルタージュからよく窺われる。民主政治を理念とする議会制に巣くうさまざまな弊害（それは現代日本のそれと奇妙に酷似している）、自我礼賛の作家として政界へ打って出たパレスの政治家としての無力さ、市民の中に広がりだしたナショナリズムの傾向とともに不気味に顕在化する反ユダヤ主義……とりわけ早い時期に書かれた前二者は、ヘルツルのみならずしい文学的感性と鋭敏な批評精神に浸透されている。そして、パリ生活の三年目の一八九四年秋、ユダヤ人の砲兵大尉ドレフュスの逮捕によって、のちに全ヨーロッパを震撼させる事件が始まる。ヘルツルの『ユダヤ人国家』や『フランスの状況』が、いずれもこの事件がゾラの弾劾（一八九八年一月）によって世間の注目を浴びる以前に書かれていることは、ヘルツルのユダヤ人としての本能的な危機感覚とユダヤ人問題に対する深い洞察によるものなのであろう。

長期間にわたるフランスでの体験は、ヘルツルを「自己目的としての文学とは異なるものへの自覚」へと導き、彼の同化主義的思想を急速にシオニズム運動実践の方向へ導いていったが、これを決定的にしたもうひとつの原因は、八〇年代に入ってオーストリア・ハンガリー政界や思想界に高まった反ユダヤ主義の声と、これに合わせたかのように続発した東欧におけるユダヤ人迫害であった。ちょうど『ユダヤ人国家』が執筆されているころに起こったユダヤ人に対する執拗な迫害は、この書に収めた『ボヘミアにおけるユダヤ人狩り』と『ガリチアの劫火』に激しい憤りをもって描かれている。

一八九六年二月に発表された『ユダヤ人国家——ユダヤ人問題の現代的解決の試み』は、パリ滞在時代に

ほぼ一年をかけ、S・ペーア、M・ヒルシュら僅かな友人との熱心な討論をへて、渾身の力を振るって執筆された近代シオニズム宣言の書である。のちに彼はこの時期を振り返って「それは狂気のように思考する日々であった」と漏らしている。ヨーロッパにおけるユダヤ人の同化を絶望視し、新天地にユダヤ民族の新しい法治国家を建設することを目的として掲げたこの冊子は、初版三千部がウィーンのM・ブライテンシュタイン書店から出版されるや、たちまち大きな反響を巻き起こした。名のあるラビたちから賛同の声が挙がり、マックス・ノルダウを初め多くのユダヤ人がヘルツルのもとに同志として集まったが、他方、因習的なユダヤ教団体からは「神によって下された亡命の運命に逆らい、メシアの役割を篡奪する者」という非難が浴びせられ、また、反ユダヤ主義を治癒しうる病とみなす同化主義の陣営や非政治的博愛主義の立場に立つ人々からは、事態を混乱させ逆行させるものと真つ向からの反対を受けた。そればかりか、ヘルツルが心を寄せ、この思想の原動力ともした東欧・ロシアのユダヤ人たちからは、ヘルツルの主張が「ユダヤ人出てゆけ」という大衆の声をますます煽り立てる結果を生むことを憂慮する声が上がるとともに、彼らの精神的基盤であったハシディズム（東欧ユダヤ教における一種の敬虔主義）の指導者たちからは、この書には文化的・宗教的な理念において欠けるところがあることを指摘する批判が寄せられ、また、同じシオニズムの基盤に立って従来小規模ながらパレスチナへの植民活動を行っていた組織「シオンの友」は、その運動に分裂を持ち込むものとみなした。

このようにして反ヘルツルのキャンペーンが始まるとともに、「自分の課題をこの書の出版をもって完了したものとみなし」ていたヘルツルは、いやおうなしに運動の渦中に巻き込まれてゆく。それは、ただ周囲の状況に促されただけではなくて、政治的に具体的な国家建設を目標とした設計図の作成者として、おそら

く必然の道だったのであろう。ここで踏み出された革命的な先駆者の道は、「ユダヤ人国家は世界要請なのだ。だからそれは成立するであろう」という固い信念に支えられてはいたが、他方では、この書の出版直後に書かれた『操縦可能な飛行船』——明らかにユダヤ人国家の構想を寓意している——のなかに描かれているように、世間の誤解と無理解にさらされる恐ろしい難路でもあったにちがいない。

翌一八九七年以降彼の死に至る七年間に、六次にわたって（そのうち五回はスイスのバーゼル、第四次のみはロンドンで）開催されたシオニズム会議における議長としてのヘルツルの活動と、その間の運動の変遷の経緯や彼の内面的な苦悩と動揺については、本書以外に書かれたシオニズム関係の論評集や、未来のユダヤ人国家の夢を描いた長編小説『古き新国家』（一九〇二年）、さらに文学的価値をも有する『日記』（一八九五—一九〇四年）に窺われるところであり、今後の紹介と詳しい検討にゆだねられなければならない。

実践者となったヘルツルは、具体的なユダヤ人国家を建設するというこの書の目的に従って、この運動を政治的に推し進めようと熱心に活動する。第一回バーゼル会議で定められた「農民、手工業者、中小企業者の目的意識を持ったパレスチナ移住」を推進するための「全ユダヤ人の結集と組織化」は、さまざまな思惑や対立によって進展せず、彼が「ユダヤ人国家」において提唱した二つの重要な組織、つまり理念の純粹さを守り国家業務を担当する「ユダヤ人協会」と、理念を実行する機関となり土地財産の処理や経済政策の実施に当たる「ユダヤ会社」との設立は端緒につくこともできず、その先行きは不透明なものであった。（これは後に「ユダヤ人会議」と「ユダヤ国民基金」という小規模な形で創設される。）

ヘルツルはむしろ、これもバーゼル会議の議題として承認された「諸政府の同意獲得の準備」に力を尽くしている。彼がこの面を目指したのは、内外の民衆の啓蒙によって運動の基盤を築き国際的な世論を喚起し

ようという「百年河清を待つ」行き方ではなく、この書に説かれている重要な政治的方法、つまり「国家業務の代執行権」による、いわば上からの勅許状 (Charter) による早急な解決方法であった。彼が東奔西走して折衝の相手としたのは、欧米に隠然たる力をもっていたロスチャイルドを初めとするユダヤ財閥であり、当時中東やアフリカの植民地に支配権をふるっていた英国、パレスチナを領有していたトルコとその背後にあって影響力を持ち始めた帝政ドイツの指導者たち、これまたエルサレムを聖地とするキリスト教の大本山ローマ法王とイタリヤ王、そして当時東欧ボヘミア、ガリチアを領有していたヘルツルの故国オーストリアの首相と外相らであった。シオニズムが英国の政治家たちの基本的な同意——これが後のバルフォア宣言の素地となる——と、主要な強国の理解を得て、国際的にも權威ある運動となることができたのは、だれよりもヘルツルの功績に帰せられるであろう。

この書のなかでヘルツルが、ユダヤ人国家建設の地としてパレスチナだけではなくアルゼンチンを挙げていることは注目されるが、とりわけこのシオンの地を巡る問題は、度重なるシオニスト会議における中心的な論題となった。ハシディズムの伝統を持つ東欧ユダヤ人たちからは蜜と乳の流れる聖地パレスチナとダヴィデが城を築いたといわれるエルサレムのシオンの丘とに固執する強い要求が出されたし、のちにはイギリスの植民相から英領ウガンダ案が示されヘルツルもまた一時この可能性を探ったりするが、いずれも内外の困難に直面せざるをえなかった。その交渉と調整にヘルツルは心身をほげしく消耗する。このような実践の合間には、各地での数多い講演旅行と夜遅くまでの執筆活動が続けられていたのである。さらに、若いカール・クラウスが第一回シオニスト会議について報ずるウィーンの新聞報道を「シオンのための一クロネ奇金」(一八九八年)のなかで辛辣に風刺したように、時の人となったヘルツルは、話題をあさりフレ

ズを弄ぶジャーナリズムの渦中に巻き込まれざるをえなかったろう。当時のジャーナリズムの宿弊は、権謀と外交辞令をこととする貴顕の政界とともに、一人の繊細な文筆家にとって大きな負担となっただろうと想像される。一九〇四年四月に医師から命じられた温泉療養は、彼の弱った心臓をもちや回復させることができなかった。その病床にあっても、彼は内外との折衝やこの年のシオニスト会議の準備の仕事から片時も離れなかったのである。さらに、前年のキシネフにおけるユダヤ人大量虐殺事件をはじめ、ますますその暴威をふるう東欧のユダヤ人迫害が病床の彼を焦慮させた。春から夏にかけてオーストリア全土でユダヤ人ホイット運動が広がるなかで、ヘルツルはウィーンの南にあるエドラーハの病院で肺炎を併発し、呼び寄せた母と娘にみとられながら、事をシオニズムの同志に託して四十三年の短い生涯を閉じた。

『ユダヤ人国家』が出版されてからすでに百年近い歳月をへた今日、ここにいくつかの問題点を見出すことは容易だろう。たとえば、古代ローマ法に発する政治理論としての「国家業務の代執行」(negotiorum gestio) という寡奪・独裁に転化しかねない方法、経済政策上では資本主義的企業と集団的労働扶助との混合を目指す「相互扶助主義」(Mutualismus) さらに「我々ならば狩り集めた野獣群のなかにピクリン酸爆薬を投ずるだろう」(二一ページ) という表現にはしなくも露呈されている、不吉な未来を予感させる近代技術への恐ろしい盲信と西欧文明への無批判な依拠、「七時間労働制」などの社会主義的な施策の安易な導入、そして絶頂期にあった大英帝国の植民政策の模倣……これらの問題点を我々は容易に指摘することができるだろう。現代イスラエルの思想家アモス・エロンは、それを「単純さ、希望的観測、家長的な依怙蟲質そして無知などの混淆」と批評している。



しかしなんといつてもこの書の持つ最大の問題点は、パレスチナあるいはアルゼンチンについての無知と、そこに現に住む人々への配慮の欠如である。たしかに、もっぱらヨーロッパ的な教養の中で育ち、十九世紀のヨーロッパ諸国に澎湃として起こったナショナリズム思想に強い影響を受けていた一人のユダヤ知識人たいてい、これを求めるのはおそらく酷なかもしれない。しかし、この問題は、すでに出版後もなく何人かの親しい同志から批判されたところでもあった。たとえば、共にシオニスト会議を準備したノルダウがヘルツルに向かって言ったという、「そう、パレスチナにはアラブ人たちがいるんだ! ……だから僕は大変な不正を犯している」という言葉、そして、N・ゴルトマンの「シオニズムの最大の思想上の誤りは、アラブ人の歴史的な要求や彼らのパレスチナにおける生活権について触れていない点だ」という指摘には、初期シオニズム運動の指導者たちの広い視野と率直な反省を認めることができる。のちにヘルツルが前述のウガンダ案に固執し（もちろんそこにも先住する人々がいるにしても）、その賛否をめぐって激しい対立を招いた背景にも、おそらくこの反省の念がこめられていたに相違ない。この第四回シオニスト会議における困難な討議は、すでに弱っていた彼の心身に重大な結果をもたらしたのであった。

いずれにしても、アラブ軽視のこの欠陥の背後には、当時のヨーロッパ知識人たちの発想の根底にあった、ヨーロッパ至上の優越感が潜んでいたことは疑いない。この書においても、聖地エルサレムを訪れるキリスト教徒への丁寧な配慮は示されても、この地にはるかに多数現に住んでいるイスラム教徒への言及はまったく見られず、民族協和——これは初めてのパレスチナ旅行のうちに書かれた長編小説『古き新国家』のなかで一層ユートピア的に展開される——の短い提唱はあっても、「ヨーロッパのために我々はその地でアジアに対する防壁の一部を作るであろうし、野蠻に対する文化の前哨の任務を果たすであろう」とヘルツルは

記すのである。

その視線は、このほぼ一〇年後の一九〇六年（明治三十九年）に、極東からはるばるとパレスチナを訪れたキリスト教徒の文学者の、西欧の精神文化に情熱的な憧憬の目を注いだ、いかにも近代日本の知識人らしい観察に通じているといえるかもしれない。徳富蘆花の『巡礼紀行』は、当時のパレスチナを描く興味深い貴重な文章ではあるが、彼は、イスラム教モスク、ユダヤ教シナゴグ、ギリシャ正教の聖堂、カトリックの教会などが林立し、トルコ人、ユダヤ人、そしてアルメニア人やパレスチナ人たちが混住する混沌としたエルサレムに失望し、「エルサレム城内の瞥見は、人をして一炬に焼かんことを欲せしむ」の言葉を残して、はるかに牧歌的なナザレへと去ってゆくのである。因みにこの記述は、エルサレムを訪れたヘルツルの日記に繰り返されている汚物浄化願望と軌を一にしている。彼は乞食のたむろする「嘆きの壁」の聖蹟に格別な感銘を受けることなく、「聖所以外のバラックは焼き払い、浄化し……不潔きわまる厭わしい旧市街の外に美麗な新市街を作らん」と欲するのである。ところで、蘆花はトルストイを訪れるべくバルカン半島をさらに北上し、ヘルツルに衝撃を与えたあの「ユダヤ人虐殺のキシネフに近きビンデリーにて汽車を乗り換え」オデッサを経てキエフへ向かっているが、車中、あるユダヤ人から、日露戦争で日本がロシアを破ったことを「我がために復讐してくれた」とそっと感謝されるくだりは、まさしく当時のウクライナのユダヤ人の状況とその鬱屈した心情をかいま見させる。

この四十年後、さまざまな歴史的経緯を経てパレスチナに建国されたイスラエル国家に、もしもあの初期シオニズムの指導者たちの反省が十分に生かされ、また、蘆花の筆に、新しく移住してきたとおぼしい「シオンの尼寺に宗派国籍の関係なく一百あまりの孤児を収容したるは嬉し」と記されている、あの真のシオニ

ズム運動の先駆的精神が引き継がれていたら、ひよっとすると、いま激しい抗争を繰り返している両陣営の間の「前哨」は異なった様相を見せていたかもしれない。長い苦難の歴史を記憶するイスラエルの民に、いま、「迫害のなかで学んだ寛容の精神」(ヘルツル)と、民族共生への努力を求めることは、また現代の「世界要請」でなくて何であらうか。しかし、いずれの側であらうと、自己をも不浄と自覚することができず、他を焼き払おうとする浄化願望をもつ文明や人間に、それを求めることは難しいかもしれない……。

だが、ヘルツルには時間が残されてはいなかった。彼の焦慮には、預言者のあまりにも鋭敏な感覚と本能的とも言える危機意識が潜んでいた。それはただ彼一人の生命の消滅に対してではなく、生存の危険にさらされている百万の東欧ユダヤ人の生命に対してであった。「ユダヤ人国家」が公刊された翌一八九七年、皇帝フランツ・ヨーゼフの度重なる拒否に逆らって、激烈な反ユダヤ主義者ルエガーを四たび市長に選んだウィーン市は、ヘルツルが死を前にして最後の力を振りしほってシオニズム運動に献身していたころ、オーストリアの西の辺境から一人の若者を迎えていた。やがてこの都市によって狂信的な反ユダヤ主義者に育て上げられるのがヒトラーである。ヘルツルの末期の目には、三十余年後のガリチアの一地方アウシュヴィッツの光景が浮かんではいなかったであろうか。たしかに彼は性急で、エロンの言うように「単純」であったかもしれない。しかし、K・テトロフが編んだ「T・ヘルツル、あるいは世紀末のモーゼ」の冒頭に掲げられているF・ローゼンツヴァイクの言葉を借りるならば、「ヘルツルには、モーゼと預言者たちの姿が彷彿する。彼は、ただひとつユダヤ人の苦難という現実から、シオニズムの構想を作り上げるほどの単純さを持ち合わせていた。その点にこそ彼の偉大さがあるのだ」。そして、ヘルツルの伝記を書いたユーリウス・シェープスの言うように、「彼はロシア・ポーランドの百万のユダヤ人を救おうとしたが、その願いは、六百万人の

犠牲を払って、第二次大戦後に実現の道に立ったのである」。

ここに訳出したヘルツルの著作の原題とその発表年月は次のとおりである。

- 「ユダヤ人国家——ユダヤ人問題の現代的解決の試み」(Der Judenstaat.——Versuch einer modernen Lösung der Judenfrage. 一八九六年二月)
- 「ボヘミアにおけるユダヤ人狩り」(Die Jagd in Böhmen. 一八九七年十一月)
- 「消え去った時」(Die „entschwundenen“ Zeiten. 一八九七年十二月)
- 「フランスの状況」(Französische Zustände. 一八九七年十二月)
- 「ガリチアの劫火」(Feuer in Galizien. 一八九八年六月)
- 「法律の敵」(Der Feind der Gesetze. 一八九四年春)
- 「ジャーナリストの学校」(Die Schule des Journalisten. 一八九五年)
- 「操縦可能な飛行船」(Das lenkbare Luftschiff. 一八九六年夏)

なおこのあとがきと訳注はとくに次の書物に多くを負っています。記して謝意を表します。

Klaus Dethloff: Einleitung zu „Theodor Herzl oder Der Moses des Fin de siècle.“ Hermann Böhlau Nachf., Wien・Köln・Graz 1986

Alex Bein: Theodor Herzl, Biographie. Ullstein Buch Nr. 35163, Frankfurt/M 1983

Julius H. Schoeps: Theodor Herzl, Wegbereiter des politischen Zionismus. Musterschmidt Göttingen, Zürich · Frankfurt 1975

Julius H. Schoeps: Einleitung zu „Theodor Herzl: Wenn ihr wollt, ist es kein Märchen“ Jüdischer Verlag im Athenäum Verlag, Kronberg 1978

大仏次郎『ドレフュス事件 ブウランジェ將軍の悲劇』。大仏次郎ノンフィクション全集第一巻 朝日新聞社 一九七一年

矢田俊隆『ハプスブルク帝国史研究』。岩波書店 一九七七年

一九九一年三月

佐藤康彦



《叢書・ユニベルシタス 330》

ユダヤ人国家

1991年5月30日 初版第1刷発行

テオドール・ヘルツル

佐藤康彦 訳

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒102 東京都千代田区富士見2-17-1

電話03(3237)1731/振替東京6-95814

製版, 印刷・三和印刷/鈴木製本所

© 1991 Hosei University Press

Printed in Japan

ISBN4-588-00330-5